

□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(設問の都合上、原文の表記を一部改めたところがあります。)

あなたがたはとくと考えられたことがあるでしょうか。今も日本がすばらしい手仕事の国であるということ。

西洋では機械の働きが余りにも盛んで、手仕事の方は衰えてしまいました。しかし①それに片寄り過ぎてはいろいろの害が現れます。それで各国とも手の技を盛り返そうと a ツトめております。なぜ機械仕事とともに手仕事が必要なのでありましょうか。機械によらなければできない品物があるとともに、機械では生まれにくいものが数々あるわけがあります。すべてを機械に b マカせてしまうと、第一に国民的な特色あるものが乏しくなつてきます。機械は世界そのものを共通にしてしまう傾きがあります。それに残念なことに、機械はとかく利得のために用いられるので、できる品物が粗末になりがちであります。それに人間が機械に使われてしまうためか、働く人からとかく悦びを奪ってしまいます。こういうことが禍いして、機械製品には良いものが少なくなってきました。これらの欠点を。オギナうためには、どうしても手仕事を守られねばなりません。その優れた点は多くの場合民俗的な特色が濃く現れてくることと、品物が手堅く親切に作られることであります。そこには自由と責任とが保たれます。そのため仕事に悦びが伴ったり、また新しいものを創る力が現れたりします。それゆえ手仕事を②最も人間的な仕事と見てよいであります。ここにその最も大きな特色があると思われます。仮にこういう人間的な働きがなくなつたら、この世に美しいものは、どんなに少なくなつてくるであります。各国で機械の発達をはかるとともに、手仕事を大切にするのは、当然な理由があるといわねばなりません。西洋では「手で作ったもの」というと直ちに「良い品」を意味するようにさえなってきました。③人間の手には信頼すべき性質が宿ります。

欧米の事情に比べますと、日本は遙かにまだ手仕事に恵まれた国なのに気づきます。各地方にはそれぞれ特色のある品物が今も手で作られつつあります。 A ※手漉きの紙や、※手轆轤の焼き物などが、日本ほど今も盛んに作り続けられている国は、他には稀ではないかと思われます。

B 残念なことに日本では、④かえってそういう手の技が大切なものだという反省が行き渡っておりません。それどころか、手仕事などは時代にとり残されたものだという考えが強まってきました。そのため多くは投げやりしてあります。このままですと手仕事はだんだん衰えて、機械生産のみ盛んになる時が来るであります。しかし私どもは⑤西洋でなしに※過失を繰り返したくはありません。日本の固有な美しさを守るために手仕事の歴史をさらに育てるべきだと思ひます。その優れた点をよく省み、それを更に高めることこそわれわれの務めだと思ひます。

〔中略〕

元来我が国を「手の国」と呼んでもよいくらいだと思います。国民の手の器用さは誰も気づくところであります。手という文字をどんなに沢山用いているかを見てもよく分かります。「上手」とか「下手」とかいう言葉は、直ちに手の技を語ります。「手堅い」とか「手並みがよい」とか、「手柄を立てる」とか、「手本にする」とか皆手にちなんだ言い方であります。「手腕」があるといえれば力量のある意味であります。それゆえ「腕利き」とか「腕揃い」などという言葉も現れてきます。それに日本語では、「読み手」、「書き手」、「聞き手」、「騎り手」などのごとく、⑥ほとんどすべての動詞に「手」の字を添えて、人の働きを示しますから、手にちなむ文字は大変な数に上ります。

そもそも手が機械と異なる点は、それがいつも直接に心とつながれていることであります。機械には心がありません。これが手仕事に不思議な働きを起こさせる※所以だと思います。手はただ動くのではなく、いつも奥に心が控えていて、これがものを創らせたり、働きに悦びを与えたり、また道徳を守らせたりするのであります。そうしてこれこそは品物に美しい性質を与える原因であると思われます。それゆえ手仕事は一面に心の仕事だと申してもよいでしょう。手よりさらに神秘的機械があるでしょうか。一国にとつてなぜ手による仕事が大切な意味を持ち来すのかの理由を、誰もよく省みねばなりません。

(柳宗悦 「手仕事の日本」)

※過失：不注意から生じた失敗。
※手漉き：機械を使わずに、手で紙をすくこと。
※手轆轤：手で回す陶磁器を成形するとき用いる回転台。
※所以：理由。

問1 〳〳 a s d のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

| | |
|---|-----|
| a | (め) |
| b | (せ) |
| c | (う) |
| d | (み) |

問2 〳〳 ①「それに片寄りすぎてはいろいろの害が現れます。」について。(i) 「それ」が指している内容を本文中から四字で抜き出しなさい。

| |
|--|
| |
| |
| |
| |

(ii) 「いろいろの害」とはどのようなことをいうのですか。本文中のことはを使って三つ挙げなさい。

| |
|--|
| |
| |
| |
| |

| |
|--|
| |
| |
| |
| |

| |
|--|
| |
| |
| |
| |

問3 〳〳 ②「最も人間的な仕事」とありますが、どのような点が「人間的」のですか。本文中のことはを使って五十五字以内で答えなさい。

| | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |

問4 〳〳 ③「人間の手には信頼すべき性質が宿ります。」とありますが、この「手」の「性質」とはどのようなものをかを述べている一文を本文全体から探し、初めの五字を答えなさい。

| |
|--|
| |
| |
| |
| |
| |

問5 A、 B に適する語を次のア～エから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ところで イ たとえば
ウ あるいは エ しかし

A B

問6 ④「かえってそういう手の技が大切なものだ」という反省が行き渡っておりません。」とありますが、これはどうしてですか、解答欄に合うように本文中から十字以内で抜き出しなさい。

・日本は () 国だから。

| | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

問7 ⑤「西洋でなした過失」とありますが、それはどんなことですか、最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 手仕事を利得のために用いて、粗末な品物を作ったこと。
イ 機械の発達をはかるとともに、手仕事も大切にしたこと。
ウ 機械をどんどん使ったために、働く人手が余ったこと。
エ 機械仕事に片寄りすぎて、手仕事を大切にしなかったこと。

問8 ⑥「ほとんどすべての動詞に『手』の字を添えて、人の働きを示します。」とありますが、人を指す意味とは違う意味を持つものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 働き手 イ 作り手 ウ 決め手 エ 送り手

問9 本文の内容と合致するものとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 西洋に比べて日本は手仕事の発達した国であるため、機械の発達や機械仕事の普及が西洋ほどなされなかった。
イ 機械と違って手は心とつながっており、その心のなせる技がさまざまな美しいものを生み出してきた。
ウ 日本には手に関する言葉が多いことから、昔から手に対する信仰心のような気持ちの人々に根付いていたことがわかる。
エ 元来日本では「手で作ったもの」は機械製品に比べて劣っているという固定観念があり、いかげんに扱われていた。

② 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(設問の都合上、原文の表記を一部改めたところがあります。)

主人公の次郎は幼い頃実家とは違う家に預けられていた。父の俊亮、母の民、兄の恭一、弟の俊三、祖父母のいる実家に戻されたが、なかなか家になじめずにいた。この場面は祖父の大事にしていた算盤がこわれたのを、母が兄弟三人に問いただした後のことである。

その日は土曜で、俊亮が帰ってくる日だった。お民と次郎は、めいめいに違った気持ちで彼の帰りを待っていた。次郎は薪小屋に一人 A 腰をおろして考えこんでいた。そこへ、お糸婆さんと直吉とが、代わる代わるやって来ては、お父さんのお帰りまでに、早く何もかも白状したほうがいい、といったようなことをくどくどと説いた。もうみんなも、次郎を算盤

の破壊者と決めてしまっているらしかった。

次郎は彼らに一言も返事をしなかった。そして、父が帰ってきて母から今日の話を聞いたら、きつと自分でこの部屋にやって来るに違いない。その時何と言おうかと、考えていた。

(何でおれは罪をかぶる気になったんだらう)

彼はその折の気持ちだが、さっぱりわからなくなっていた。そして、いつもの押しの強さも、皮肉な気分もすっかり抜けてしまった。彼は自分で自分を哀れっぽいもののようにすら感じた。涙がひとりでに出た。――彼がこんな弱々しい感じになったのはめずらしいことである。

ふと、小屋の戸口にことごとと音がした。彼は、またかと思つて見向きもしなかった。だれもはいつて来ない。しばらくたつと、また同じような音がする。なんだか子供の足音らしい。彼は不思議に思つて、そのほうに目をやった。するとなかば開いた戸口に、俊三が立っている。
(ちくしょう！)

彼は思わず心の中で叫んで、唇をかんだ。

しかしなんだか俊三の様子が変である。右手の※食指を口に突っこみ、ややうつ向きかげんに戸によりかかって、体をゆすぶっている。ふだん次郎の目に映る俊三とはまるでちがう。

次郎は一心に彼を見つめた。俊三は上目をつかつて、おりおり盗むように次郎を見たが、二人の視線が出つくわすと、彼はくりと後ろ向きになって、戸によりかかるのだった。
かなりながい時間がたった。

そのうちに次郎は、俊三にきけば、算盤のことがきつとはつきりするにちがいない、ひよつとするとこわしたのは彼だったかもしれない、と思つた。

「俊ちゃん、何してる？」

彼はやさしくたずねてみた。

「うん……」

俊三はわけのわからぬ返事をしながら、敷居をまたいで中にはいったが、まだ背中を戸によせかけたままで、 B している。

「算盤こわしたのは俊ちゃんじゃない？」

「……………」

俊三はうつ向いたまま、下駄で土間の土をこすつた。

「僕、だれにも言わないから、言つてよ。」

「あのね……………」

「うむ。」

「僕、こわしたの。」

次郎は C 思った。しかし彼は興奮しなかった。

「どうしてこわしたの？」

彼はいやに落ち着いてたずねた。そしてきつき自分が母にたずねられたとおりのことを言っているのに気がついて、変な気がした。

「転がしてたら、石の上に落っこちたの」

「縁側から？」

「そう」

「お祖父さんの算盤って大きいかい？」

「ううん、このぐらい」

俊三は両手を七八※寸の距離にひろげてみせた。次郎は、いつの間にか、俊三が憎めなくなつていた。

「俊ちゃん、もうあつちに行つといで。僕、だれにも言わないから」俊三は、ほつとしたような、①心配なような顔つきをして、母屋のほうに去つた。

そのあと、次郎の心には、②そろそろとある不思議な力がよみがえつてきた。むろん、彼に、③十字架を負う心構えができあがつたというのではない。彼はまだそれほど俊三を愛していないし、また、愛しうる道理もなかった。俊三に対して、彼が感じたものは、ただ、かすかな憐憫の情にすぎなかったのである。しかし、このかすかな憐憫の情は、これまでいつも俊三と対等の地位にいた彼を、急に一段高いところに引きあげた。それが彼の心にゆとりを与えた。同時に、④彼の持ち前の皮肉な興味が、むくむくと頭をもたげた。自分でやったことをやらないとがんばつて、母を手こずらせるのもおもしろいが、やらないことをやったと言いきつて、母がどんな顔をするかを見るのも愉快だ、と彼は思った。いわば、※冤罪者が、※獄舎の中で、裁判官を※冷笑しながら感ずるような冷たい喜びが、彼

の心の隅で芽を出してきたのである。

彼はもうだれもこわくはなかつた。父に煙管でなぐられることを想像してみたが、それさえいたしたことではないように思えた。D 彼は、これからの成り行きを人ごとのように眺める気にさへなつた。そして、今度母に詰問された場合、筋道の通つた、もっともらしい答弁をするために、彼はもう一度薪の上に腰掛けて考えはじめた。

もうその時には日が暮れかかつていた。小屋はしだいに暗くなつてきた。そろそろ夕飯時である。しかし、お糸婆さんも、直吉も、それつきりやつて来ない。このまま放っておかれるのではないかと思うと、さすがにいやな気がする。かといつて、こちらからのこのこ出て行く気には、E ない。

(父さんはもう帰つたかしらん。帰つたとすればこの話を聞いて、どう考えているだろう。父さんまでが、もし知らん顔をして、このまゝいつまでも僕を放つとくとすると、――) 次郎はそう考えて、胸のしんに冷たいものを感じた。そして、次の瞬間には、⑤その冷たいものが、石のように凝結して、彼をいよいよがんこにした。

(下村湖人 「次郎物語」)

※食指：ひとさし指。

※寸：長さを表す単位。約3.03センチメートル。

※憐憫：かわいそうに思うこと。

※冤罪：無実の罪。

※獄舎：囚人を収容しておく所。

※煙管：刻みたばこを吸うための道具。

※詰問：相手の非を責めて、厳しく問い詰めること。

※凝結：感情や考えなどが一つにこりかたまること。

問1 A・B に入れることばとして最も適切なものを次のア～カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア どのしりと イ うろろう ウ ぽつねんと
 - エ もじもじ オ いらいら カ うつとりと
- A B

問2 C に入れることばとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア うそだと イ 裏切られたと
 - ウ しめたと エ 失敗したのだと
-

問3 ①「心配なような顔つきをして」とありますが、「俊三」は何が心配だったのでですか、四十字以内で答えなさい。

| | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |

問4 ②「そろそろと不思議な力がよみがえつてきた。」とありますが、このときの次郎の気持ちの説明として、最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 弟がかわいそうだという気持ちで胸がいつぱいになった。
- イ 弟に対して優越感を持つことで気持ちにゆとりができた。
- ウ 素直に答える弟の姿を見て、弟に同情する気持ちが生まれた。
- エ 弟に対する愛情に気付くことで自然と心にゆとりが生まれた。

問5 ③「十字架を負う心構え」とありますが、この場合、どんな心構えのことですか。最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 罪を否定する心構え イ 悪人になる心構え
- ウ 改心をする心構え エ 罪をかぶる心構え

問6 ④「彼の持ち前の皮肉な興味」とありますが、この気持ちを具体的に言いかえた部分を四十字以内で探し、初めと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

く

| | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |

問7 D・E に入れることばとして適切なものを次のア～カから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア なおさら イ ただ ウ むしろ
 - エ すっかり オ けれども カ まさに
- D E

問8 ⑤「その冷たいものが、石のように凝結して、彼をいよいよがんこにした。」とありますが、この部分の説明として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分に対するお糸婆さんや直吉が薄情であることを思うと、持ち前の意地が張りが出てきて心がかたくなになったということ。
- イ 母に問い詰められても、自分だけが知っている真実を胸に立ち向かえばいいと思うと、決意がますますかたくなになったということ。
- ウ 母や他の誰に責められてもかまわないが、父に見放されたらつらいと思うと、心がさらにかたくなになったということ。
- エ 父に責められたら自分の意思を通すことができなくなると思うと、反発心から心がかたくなになったということ。

問9 ①～⑤の漢字の部首と画数を答えなさい。部首は後のア～オから選び、記号を右の解答欄に、画数は漢数字を左の解答欄に書きなさい。

- ① 往 ② 預 ③ 返 ④ 疲 ⑤ 開
 - ア しんによう イ やまいだれ ウ もんがまえ
 - エ ぎようにんべん オ おおがい
- | | | |
|---|--|--|
| ① | | |
| ② | | |
| ③ | | |
| ④ | | |
| ⑤ | | |

問10 ④ 次のことわざの()にあてはまる漢字をそれぞれ一字で答えなさい。ただし、二つある()には、同じ漢字が入ります。

- ① 唇亡べば()寒し。
 - ② 魚の()を得たる如し。
 - ③ 朱に交われば()くなる。
 - ④ 類は()を呼ぶ。
 - ⑤ 捨てる()あれば拾う()あり。
- | | | |
|---|--|--|
| ① | | |
| ② | | |
| ③ | | |
| ④ | | |
| ⑤ | | |

